

「奥の細道」を辿る旅の途中、加賀の那谷寺に立ち寄る。だが夕刻遅く、拝観時間をすでに過ぎていた。

『奥の細道』の一節に

山中のいで湯に行くほど、白根が嶽跡にみなしてあゆむ。左の山際に観音堂あり。花山の法皇、三十三所の巡礼とげさせ給ひて後、…那谷と名付給ふと也。那智・谷汲の二字をわかち侍しとぞ。奇石さまざまに、…殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

西国三十三所歩き巡礼の縁で仲間となった我々三人としては素通りする訳にはいかない。近くの山中温泉に泊まり、翌朝再び寺を訪れた。

上層三間の楼閣造り、下層打ち放しの壮麗な山門をくぐる。真直ぐに伸びる参道の石畳、両脇の石灯籠や丸い大きな縁石、境内の地面や踏み石、石段、それらが全て輝くよつな緑の苔で覆われている。杉並木や杉木立の太い幹も地面より一メートルほどの高さまで苔むしている。

周囲には楓などの広葉樹も植えてあるが、色づくにはまだ時季が早く、青々としている。左右の山林を背景にまさにグリーン一色の世界である。参道を進むと、芭蕉が詠んだ大きな白い屏風岩の天然庭園「奇岩遊仙境」に出た。谷間の境内には、岩窟を胎内に見立てた本殿、三重塔、金堂、書院など立派な堂宇が離れ離れに建つ。さすが加賀百万石の前田藩主が天皇の命を受けて再興した大寺院である。今回の旅計画まで寺の名前すら知らなかっただけに、驚きは一入である。

この神仏習合の寺のご神体は白山である。奥の広々とした苔の広場では白い針金や紐を使って、その山頂から麓までの複雑な水脈網を模した壮大な現代アート作品の展示も行われていた。当山開祖の教えである大自然と人間の関わり、「自然智」を表現しているのかもしれない。

それについても境内へ最初に立ち入った時の第一印象は強烈であった。芭蕉は白い奇岩に感動していたが、私は緑の苔が醸し出す気に呑み込まれた。山門を出ながらその際の思いを本歌取りで一句詠む。

苔寺の苔より青し那谷の秋